
IS『に』転生ってふざけんな！

出川 戦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ISに『転生つてふざけんな！

【ISBN】

N4278Z

【作者名】

出川 戦

【あらすじ】

この物語は、主人公が福音に転生して様々な困難に操縦者のナターシャと共に立ち向かっていく物語である。

第1話（前書き）

完全なる思いつきです。連載という判断で大丈夫か・・・?

気付くと、俺は真っ暗な空間にただ1人いた。

(なんだ・・・)「は・・・?夢の世界ってヤツか?」

「ここはあなたの処刑場です」

女性の声が聞こえた。 つてちょっと待て!

(なんだよ処刑場つて! ていつかあんた誰だ!? あれ? 声がない・・・)

「私は神様です。ここではあなたは魂だけの存在なので声は出ません」

(ああ、なんだそういう事が・・・つて納得できるか!...)

「五月蠅いですよ」

神様(自称)は冷たい声でそう言つた。

「まず説明しなければなりませんね。人の寿命は、その人が生前犯した罪によって減つていきます」

(あ、ひょっとしてそっちの手違いでまだ死ない俺を殺しちゃつたからどつかの世界に転生させてくれるとか・・・つて俺死ん

だのー?)

「やうです。あなたは死んだんです。あと、私たちは手違ひなんてしません。なんせ全知全能ですから!!スなんてあるハズ無いのです」

(おおつふ・・・・じゃあ、なんで俺ここにいるの?)

「あなたは小学生の時、同じクラスの子からゲームを借りたまま返しませんでしたね? 」

(・・・・・)

「さりにあなたは別の子から借りたマンガを返さなかつたり、アンティルールで決闘したりしましたね」

(・・・・・はい・・・・・)

「さりにあなたは物心ついた頃からつまみ食いをし続けていましたね」

(ちよつと待つてくれ! そんな程度で寿命削られてたのか!?)

「そうですね。積もりに積もつた小さな犯罪が実を結んで、こうして10代でめでたくぼっくり逝く事になつてしましましたね(笑)」

((笑) ジャねえ!! 何が悲しくて17で死ななきやならなかつたんだよチクショウ!)

「あ、一応言つておきますけど、あなたは本当は13歳で死ぬ」とになつてました」

(なお酷いわー！…………って、おい。それはどうこう事だ？)

「あなたは非常識なほど懸運が強かつたので、何度も死神が迎えに行きましたがあなたが死ぬことはありませんでした。なので私が直接手を下す事になつたのです」

(・・・俺つて、何度も死神に迎えに来られてたんだ・・・)

「つたぐ、役立たずが・・・・。それで、私が直接人の生死に手を出す事はあまり望ましくない事なので、その処置としてあなたをどこのか適当な世界に転生させます」

(今、神様が真っ黒になつた気が・・・・。ついでこれ、棚ボタなんじやないか？)

「あなたが思つてゐるほど楽な世界なんてありませんよ。それじゃあせめて行く世界くらいは選ばせてあげましょうか」

(なりHの世界で一ちゃんとHS動かせるみつけてくれよー)

「誰が貴様のよつなゴリ虫の言つ事なんか聞くか」

(・・・・あれ？なんかキャラ変わつてない？)

「『』た『』た五月蠅いー！ HSですね！ それでは逝つてらっしゃーい」

(字違ひーー・・・・あれ・・・・なんだか意識が遠のいていく)

(・・・・あれ？ じにはどいだ？)
俺が意識を取り戻すと、目の前には何台もの機械と大勢の研究者が忙しそうにしていた。

(あ、まさか俺、こここの研究者にでも憑依転生したのか？それにしても、こここの研究者は外人ばっかだな。外国語なんて何も出来ないぞ、俺)

などと考えていたら、俺の方に向かって金髪の20歳くらいのすげー綺麗な女性が歩いてきた。服装はレオタードのような格好をしている。おそらくアレがISステッジだろう。

(・・・つてちょっと待て！あの人なんで俺の方に来てるんだ！？まさか俺の事が好きなんじゃないだろ？！）

その時、俺は気付いた。『俺、さつきから声出してなくね？』と。

そして目の前の女性は・・・・・3巻末と6巻の初めに出でてきたナターシャさんじゃないか！

まさか・・・・まさかとは思うが・・・・俺、ちゃんと人間に
に転生してますよね、神様ア！！

「これからようじくね、『銀の福音』シルバリオ・ゴスペル」

やつぱりかああああいーーー！

第1話（後書き）

ウザい主人公でいいません……。

ナターシャは福音の事を「あの子」としか呼んでいなかつたので、最後の方は悩みました。悩んだ結果がアレですが……。

「なんでナターシャが日本語で挨拶しているの?」という質問には、担当者が不在のためコメントできません。

下らない文章になるでしょうが、応援よろしくお願ひします。

第2話（前書き）

「作者でーす」

神「神でーす」

「とゆーワケで、今作の前書き後書きは私達2人が進行させていただきまーす」

神「よく神界まで来れたな」

「ほら、作者って言ってみれば神様より上じゃん。言ってみれば界王様じゃん。だからフツーに来れるんだよ」

神「あ、そ」

「反応薄いなー」

神「じゃあ今回は主人公君の生前犯した罪について、まだ書いてなかつた細かいところも説明してさしあげましょ」

「でたよ、上から目線」

神「d m r k s。彼は1話で述べた他に、授業中にマリカしていたりモンハンしていたりしていた」

「みんなもよくやつてるよね」

神「黙れ喋るな息をするな。他にも小2の頃から菓子パンやお菓子を持ちこんで早弁していた。中1の時は弁当だったので、早弁用の弁当を持って来ていた始末だ」

「そりやすごい」

神「あとは・・・・昼休みに決闘デュエルしていた

「私もやつてますよ、ソレ」

神「さらに小1の時『お菓子あげるからついておいでよ』と知らない大人から声をかけられた時に、鼻で笑いながら『今時そんなのいや2歳児でもついてこねエよハゲ。警察に突き出されたくなかつたら財布を置いてさつさと消えな』と言い放つたり

「それはひどい・・・・・」

神「他にも余罪はあるが・・・・あまり長くするのもなんだ。これ

「ひりおひでじてここへ
『やだね。では本編どおりや』

(これ、終ったんじゃね?)

俺はまずそう思った。本当なら頭を抱えて絶叫して、なにか硬い物に頭部をぶつけてしまいたい衝動に駆られているのだが、なんせ手足が動かない。ついでに言うと口もきけない。なにこのプレイ。誰得?

「これからよろしくね、『銀の福音』」
シルバリオ・ゴスペル
俺得でした。

(キタだろコレ!)

目の前にいるのは福音の操縦者のナターシャ・ファイルスさん。アニメで出てこなかったのが悔やまれる、挿絵で見た時「なんで2組の鈴がいてラウラがないの?」と思いながらも「なにこの新キャラのまさかのハーレム乱入」とかずつと考えて6巻で再登場した時にテンション上がっちゃった俺の好きだったキャラだ。リアルで見るとはすっげー美人。

まあどこのつまり、何が言いたいのかというと・・・・今、彼女はISースーツを身につけている。という事は、今からISに乗つたりするわけだ。

そのISが何かって?決まっているだらびこの俺、『銀の福音』だ!

つまり彼女のナイス・ボディに俺が隙間無くくつつくわけで・・・
・・ヤバい。考えただけで鼻血が・・・あ、鼻無いんだっけ。つい
でに血も通つてないわ。

（いや、そんなブルックみたいなネタを一人でやつてんじゃねえよ
！）

などと俺が至極どーでもいいことばかり考えて興奮していると、ナ
ターシャさんは俺の頭？の部分に優しく手をかざした。

「・・・・・？」

「どうかしましたか、ファイルス？」

研究者の1人がナターシャさんに尋ねたが、ナターシャさんは「い
いえ。何でもないわ」と答えた。

・・・・・つか、英語で喋ってるんだよな。なのに普通にわかつて
るぞ、俺。やっぱHSになつたから頭の方も良くなつてるものかもし
れん。

「（氣のせいいかしら・・・・。いつもとHSの反応が違うような氣
が・・・・）」

初期化と最適化が終つて気付いたのだが……。ＥＳの装甲には、俺の感覚といつもの通つていなかつた……。

どういう事がいつと、俺は初め、ナターシャさんの身体に密着するという事に対して興奮していたのだ。福音は装甲部分が結構多いから、ほとんど全身を同時に触つていられるという変態的思考で考えていたのだ。

だが現実は違つた。

ＥＳの装甲部分に感覚が無いという事は、触つている感触もクソもないのだ。ただ意識だけがＥＳの中にある　　今の俺はそういう状態なのだ。

(期待した俺が・・・馬鹿だった)
心底俺はそう思つた。

「ファイルス、調子はどう?」

オペレーターの女性がナターシャさんに訊く。

「うーん……なにか、違和感を感じるのよ。まるで誰かが私のすぐ近くにいるような……」

当たらずも遠からずです、ナターシャさん。俺がその誰かです。福音です。

「まだ一次移行^{ファースト・シフト}もできていなし……チーフ、一度コアをリセッタするべきではないでしょうか」

(……は…? ちょっと待つてくれ! もしコアがリセットされたら、俺はどうなるんだ!?) このまま何もせずにナターシャさんを間近で見られてお終いか!? あ、冥土の土産に丁度いいかも……ってそうじゃない! セツカくなんだからこのままシヤルやラウラたちとも会わせてくれよ! 臨海学校編でよオ!)

ISには、意識と似たような物がある……そいつ言ったのは、たしか山田先生だ。

その意識が俺だとしたら、コアのリセットは俺の消失に繋がりかねない。だから一刻も早く俺はナターシャさんの専用機にならなければならぬんだ!

(がんばれ俺! やればできる! びつ頑張ればいいのかわかんねけど!)

とりあえず一次移行が終りますよ! ひと元気にしておけ! 俺をこんなにした誰かさんにお祈りを捧げると……

『初期化と最適化が終了しました。確認ボタンを押して下さい』

ディスプレイにそう映し出されたのが解つた。

「つえ！ さつきまで両方とも進行度がたった3パーセントだったのに・・・・・！？」

そんなバカな。あれからけつこう時間経つてたぞ。なのに3パーセントおかしいだろ。機械壊てるんじゃねえか？

「まあいいわ。それより、一次移行が済んだんだから早くテストを始めましょう

ナターシャさんは研究員に向かつてそう言つた。

(ん？ テストって・・・・？)

俺がその疑問に気付いたまさにその時、目の前のシャッターが上がり、奥の戦闘スペースと思われる東京ドーム何個分かの広さの橢円形のスペースが姿を現した。

(コレは・・・・ILSのバトルフィールドか・・・・？)

アニメで見たアリーナの地形と酷似しているそれに、ナターシャさんは迷い無く俺を連れて行く。

今ので解つたが・・・・・ビリやーら、福音の操縦はナターシャさんによるそれが優先されるようだ。つまり、俺の意志は在つて無いようなモノ、か・・・・なんだか悲しいな。

（まあでも、間近で工事の戦闘が見られると思えば、少しは気も楽になるつてか）

俺は工事はアニメから入った。2話目を観て、すぐに原作を買った。その理由は、アニメで観た工事の戦闘シーンがすごく面白かったからだ。原作には軽く失望したが・・・。

キャラも可愛かったから好きだが・・・やっぱり、俺の中では戦闘が一番だ。

だから別に、俺自身が戦闘に参加できなくても構わない。すぐそばでアメリカトップクラスの操縦者の戦闘が観戦料タダで見続けられるんだ。こんなにいい話はそう落ちてないねきっと。

・・・・はい。強がりです。自分も専用機持つてこの大空に翼を広げ飛んで行きたいです。翼をください。屋内なので大空は見えませんが。あと翼はもうあります。まだ一次移行してないから機械っぽい多方向推進装置ですけど。

マルチスラスター

とかなんとか考へてる間に、俺とナターシャさんの正面にネイビーカラーのIS アレは、フランスの第2世代型の、ラファール・リヴィアイブか

が現れた。

（まさか、いきなり実戦つていつヤツじゃ・・・ないわけないか）

思えば一夏もそうだつた。いきなり代表候補生のセシリニアとタイムで闘うという無謀な挑戦だつた。

だが俺は一夏の一歩三歩先を行く！ なんて言つたつて、こつちは専門的知識すら単語1つも理解してないどころか見てすらいないんだからな！

（とか何とか言つても、ただ見てるだけなんですけどね～）

向こうは第2世代型だから多分一瞬で勝負が着くかな、と俺が思つていた時だつた。

リヴィアイブがアサルトライフルのロックを外したのが伝わつて来た。これは撃たれるな。

だがこつちの操縦者はアメリカで最強のIS操縦者の1人だ。さらにこの福音は高機動と高火力を兼ね備えた機体だ。

こんな牽制なんて華麗に避けて迎撃する間もなく反撃してくれるに
違い

バカアアアンッ！

バリアー貫通、ダメージ89。 シールドエネルギー残量、911。
実体ダメージ、レベル中。

(痛てエ！？ なんだコレ！？ 感覚ないクセに痛覚だけあんのかよ！！)

俺は脚部に感じた痛みに戸惑いながら、なぜナターシャさんが避けなかつたのかを即座に考えていた。これもISになつたお陰なのか？すぐに最善の判断ができるんだけど。

で、その結果浮かんできた仮説が・・・・・『俺の動く意志に比例して、ナターシャさんの反応が福音へ伝わりやすくなつたり伝えりこべくなつたりする』というのが真っ先に浮かんだ。

(ちょっと待つてくれ！　俺は戦闘訓練なんて全くやつて無い、ズブの素人なんですか？！？)

あと、今の俺は福音に搭載されているハイパー・センサーで全方位が視覚として認識できるんだけど、研究者の皆さんがなにやら不穏な動きを見せてるんですけど・・・・。

(まさか、コアのリセットか福音^{オレ}の廃棄処分についての判断じやないだろ？！？)

第2話（後書き）

「おっと、まさかの3話目で完結か？」

神「いやさすがにそれは・・・」

「そういえば、彼がなにあなたに祈つてましたけど、何かした
んですか？」

神「特に何も。やううと思えば何でもできるけど」

「・・・それでも、このままだとホントに次で連載終了す

んじゃね？」

神「大丈夫だろ。ドラゴンボールの悟空や悟飯、だつて何度も死にか
けてるのに、蓋を開けてみれば死んだのは悟空が2回だけじゃない
か」

「身も蓋もない事言うなよ。盛り上がりたいだろ」

神「そういう発言は控えろよ」

続く

第3話（前書き）

「今日は寒かった」

神「唐突だな」

「関係無いけど、部屋でストーブ点けてさあ執筆だ、と思つたらマウスの電池が切れてたり」

神「ふむふむ」

「かと思つたら、実はマウスの電源がオフになつてただけだったり」

神「残念なヤツだな」

「まあ 雑談はこれくらいにして本編始めますか」

神「本当に終わつたら面白いんだけど」

第3話

(考えるー、なんとかしてこの圧倒的なまでの危機的状況を打破するんだッ！－)

このまま死ぬのはまっぴらご免だ。だつてせっかくナターシャさんと会えたんだもん。このまま近くにいたら風呂場とかまで一緒に持つて行ってくれ……じゃない。ISの戦闘を直で感じられないじゃないか！－

(やつてやるー、やるしかないんだ！－)

「（どうこう事なの……！？ 福音が私の動きに全くついてこない！）」

私は、今までとのHISとは全く違う福音に心惹かれていた。

そもそも、HISの『銀の福音』^{シルバーリオ・コスペル}は国際条約違反の軍用HIS。前まで操縦していた量産型や競技用のHISとは少し勝手が違うとは思っていたけど・・・・HISまで違うものなのとは思っていなかった。

HISによる視覚補正で、研究所の職員が信じられないという顔で私を、福音を見つめていた。やっぱり、の人達にも想定外の事なのね。

「（HIS）は一度引き上げて、検査してからもう一回テストするのが賢明ね・・・・」

私がテストを中断しようと、通信回線を開こうとした時

微かに、声のようなものが耳に入った。

「え、そうじゃない。耳で聞いたんじゃなくて、もっといつ・・・・『感じた』とでも表現するべきな感覚。

「（まさか・・・・でも、他に考えられない）」

HISには意識と似たようなものがあり、HIS側が操縦者の特性を理解する事でその性能をより引き出させてくれるというのは有名な話だけど・・・・これほど顕著に表れるモノなのかしら？

でもさういきの声のような・・・福音(イエス)の叫び聲、あつ
と聞いたいと言つてはいたわ。正確には解らないけど。

「（一緒に、飛びましょっ

銀の福音ー）」
シルバリオ・ゴスペル

（・・・・・？）

なにか聞こえた気がした。それも音じゃなくて・・・・なにか、
こう心に直接響いてきたというか、テレパシーみたいのが。テレ
パシ - なんでしたこともされたこともないから、わかんねエけど。

（とにかく、今はあのコーカイブをどうにかしなきゃな）

確か福音は広範囲攻撃ができたな。下手な鉄砲でも、全方位に攻撃できるなら一発は当たるかもしね。

(名前なんだつたつけ・・・・・そうだ、たしか《銀の鐘》 シルバー・ベル)

ピピピッ！
《銀の鐘》起動
シルバー・ベル
攻撃を開始します

マルチスラスター
翼のような多方向推進翼に搭載された砲門36全てが開かれたのが
解った。

(モーションは・・・少し回んで、一回転だったつけ)

俺がアニメで見た記憶を呼び起こし、イメージを作る。背景はもちろん夕焼け空だ。アレはカツ「良かつたなあ。

すると、俺の身体・・・つまり福音は遂に動き出し、360度全方位に羽のようなエネルギー弾をバラ撒いた。

バトルフィールドの壁とかはエネルギー・バリアーで防御されているので、壁が壊れたりすることは無いのだが、それでもその中にいたリヴィア・イブは銀の鐘をモロに食らつたらしく、大ダメージを受けていた。

(いや強すぎだろ『銀の福音』シルバリオ・ゴスペル！！)

アニメではラスボス的扱いで、原作では第4世代型2機に墜とされたが・・・ここまでとは思わなかつたぞ、軍用IS。

なんかさつき、近接戦に持ち込むと感じたんだが・・・俺、素人だつて言つたじやん！ でもここで動かなかつたらまた体勢を立てなあされて撃たれるだろうな・・・。痛かつたんだよな、撃たれたりすると。

『銀の鐘』と表示されたアイコンが、私の前に突如現れた。

「（）の子が・・・私の気持ちに答えてくれたの？」

すぐに私はアイコンをアイタッチして、銀の鐘を起動させた。

すると、今から私が動くべきイメージが頭の中に流れ込んできた。

その動きを忠実に再現し、頭から生えた翼のような多方向推進翼の砲門からエネルギー弾を放つ。

圧倒的なまでの数のエネルギー弾が、フィールドの中全てを焼き尽くした。

そしてもちろん、その的となつた相手のリヴァイブには相当のダメージを与えた。

「（流石は軍用・・・出力がケタ違いね）」

でも油断は禁物。相手もアメリカの優秀な操縦者が搭乗しているわ。現にあれだけの火力の差を見せつけられても、まだ闘いを諦めてはいない。すぐに体勢を立て直し始めている。

この子の性能スペックは、攻撃力だけじゃなく機動力も高かつたハズ。今は出力を抑えて通常戦闘仕様にしてあるけど、本来は超高速で動けるほどのスピードがある・・・。

「（）は近接戦で一気に攻めて、勝負を着けるべきねー。」

ギュン――ツ――！

「…………？」

私は今起きた現象に、驚く事しかできなかつた。

私はただ『一気に近付こう』と思つただけなのに・・・・・この子は勝手に、イグニッション・ブースト瞬時加速と間違えるほどの急加速で相手に近付いた。

まだ接近すると命令していないのに、私の判断を上回る速さで「の子は動いた。

「（本当に、ビームでも変わった子ね）」

「あああああ。やべえ、今のはヤバかった。

ナターシャさんが近接戦をしようとしたような気がしたから、急加速で近付こうとしたのに・・・その急加速が半端ねエ！ 危うく墜落するところだった。一夏みたいに。

寸前のところで急停止が間に合ったから良いものの、一度こんな肝を冷やすような事はしたくないね。

(そういうや、俺って福音^{じぶん}がどれだけの性能を持つているのか知らないんだよな。まあ、表とか見せてもらつても解るとは思えないけど)

え？ なんでだらだらそんなに喋つていられるのかって？

それは、もつ戦闘テストが終つちやつたからなんだよな・・・。

接近中に近接武器がないかと探してたんだけど・・・福音^{オレ}、武器が翼しかなかつたんだよ。刀1本の一夏の気持ちがよく分かるぜ・・・。

だからそこからまたエネルギー弾を乱射して、そのままゴリ押しして戦闘終了。ああ、高火力つて素晴らしい。

そういうえば、ナターシャさんは俺が突っ込んだ時に（リヴィアイブに急加速したこと。べ、別に他の意味なんてないんだからねっ！）ビックリしてたから、俺の意志が優先される場合もあるって事か・・・。

まだまだ解らないことだらけだな、この状態。

とにかく今日はもうお終いみたいだし、今後の俺の行方はまさに神のみぞ知るつてことだ。

あの神様だけが、な。

第3話（後書き）

神「終わらなかつたね」

「当たり前ですよ。3話で終了」つてちょっとした記録ですよソレ

神「つち。つまんねえの」

「それはそうと、知ってるんですか？」の先

神「そりやあ神だし」

「ですよねー」

神「つーかさ、福音に近接武器無いってホントなの？」

「知らない事あるじゃん。福音戦では一回も、そういう描写は無かつたんですよ。だから持たせようかとも考えたんですが・・・やめておきました」

神「コレは今後に大きく影響を与えますね。先は考へてあるの？」

「あと2・3話分は。それから先は・・・どうじょうつか？」

神「終りで良くね？」

「せめて10話はやろうよ」

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4278z/>

IS『に』転生ってふざけんな！

2011年12月16日19時48分発行